明治四十一年一月十五日發行
明治三十七年九月七日第三種郵便物認可

明治の女子

是故に我等召されてキリストの使者となれり。我等キリストに代りて汝等が神に和かんことを爾曹に求ふ。　哥林多後書五、二十

明治の女子
第五巻壹號　**新年號**　目次

論説

迎春の辭 …… 一記者
新年の福音 …… エー、シ、マクドナルド
婦人化粧の美と信仰の美 …… 川副櫻香

文藝

湯元の紅葉 …… 辻村靖子
噫、罪劫の風 …… 加奈子
詩神の寵兒 …… 南岳生
雜詠七首 …… 辻村靖子
さすらへる聖者 …… 櫻谿生

女子青年會記事

學生聯合祈禱日に關する勸告、會員誘導委員、小石川傳導女學校、ウヰルミナ女學校、名古屋女子青年會報告

附録

二十五年の夢の跡 …… 櫻谿生

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雜誌也。
「明治の女子」は一年分郵税共金五拾錢一部郵税共金五錢とす。
日本基督教女子青年會は青年女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。
日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長 エム、エ、ホイツトマン
副委員長 岡見惠子
記錄書記 エ、ジー、ルイス
會計 フィシャー
萬國基督教女子青年會同盟委員 河井道子
萬國學生基督教同盟會委員 宮川すみ子

東京在住委員
津田梅子　渡部瀧子
エピー、ウエスト　井上友子
平野濱子

地方在住委員
大坂 ケー、ツリスツラム　京都 ジ、エス、フエルプス
仙臺 エル、ザフルー　名古屋 イ、エム、ソーパル
廣島 エヌ、ジー、ゲインス
日本女子基督教青年會幹事 エー、シー、マクドナルド
同副幹事 エス、シー、フキツシヤー

明治四十一年一月十三日印刷
明治四十一年一月十五日發行
東京市麹町區土手三番町十五番地
編輯兼發行人 エー、シー、マクドナルド
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人 島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三秀舍

日本基督教女子青年會の事に付き御尋ねの節は東京麹町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候

明治の女子第五巻第壹號

明治四十一年一月十五日發行

謹みて榮えある希望の新年を祝し
併せて
會員諸姉の
身も靈も
いやが上に健か
ならんことを祈り
たてまつる。

明治四十一年一月一日

日本基督教女子青年會

新玉の春を壽く心にもとて

○

神います姿をみよの富士が根に霞わたせり新玉の春。

○

朝な市邊三分のわらぢ野路をふみて薪賣る子の春やすらけき。

○

長閑にも年たつあしたおさな子が歌ふか春は神の御園邊。

鶴巻町青年會の一室に於て　編輯子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

迎春の辭

一記者

「乾坤一轉、希望に滿ちたる新春は來りぬ。」などと改まつて見ても、心ある方は亦例の………と思ひ給ふなるべし。

されど事實として、「新年」「お正月」など云ふ感想が如何ばかり人の胸深く進歩的革新の光りを附與するものなるかは讀者諸姉の等しく知悉し給ふ所なるべし。されば縱令、十菖六菊の譏りはあるも、吾等も亦一語「迎春の辭」なるものをものさては、恐らく天國のお仲間入りは叶ふまじき也。

改めて云ふ、「四十一年は是希望の年也。」と

今年に限つて、何となく心身共に改まつた感じの切なるは、四十一の一字ある爲にもあるまじけれど、人の齡も四十の代に入りて始めて確固たる地盤の上に立つ。云はゞ四十一年は最も希望に滿ちたる有爲多望の年也。顧みれば雜誌『明治の女子』が東都の一隅始めて呱々の聲を揚げてより既に年月(としつき)を經ること茲に五星霜、今や健(すこや)かに五歳の春を迎えて、學齡の第一歩たる幼稚園の時期に入れり。我等が等しく顧慮愛撫すべき雜誌『明治の女子』は　かくて漸く物の道理を辨へ、見、聞き、語るべき生涯の門に進める也。雜誌の發展も正に今日以後にあり。あゝ囑望注視すべきは今日以後の雜誌『明治の女子』なるかな!

謂ふまでもなく『明治の女子』は諸姉の唯一なる好標象(シムボール)なり。雜誌が此に五歳の春を迎えて幼稚園の門に入れると同樣に、明治の青年諸姉は近時新に開拓せられたる社會各部の方面に向て、各自、神より享け得たる職責を果たすべく勇往精進、萬里の旅程に上り給ふなるべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あゝ希望と幸福とに滿ち〳〵たる明治の青年諸姉よ。諸姉は本來家庭の人なると同時に亦他面眞平麗はしき社會の人たることを忘れ給ふべからず。あゝ社會の麗はしき人たる明治の青年諸姉よ。卿等の前途や光明也希望也。夢自らを辱め自棄し給ふべからず。卿等の任務や、げに甚深無量也。卿等が健なると不健なるとは、引て社會全體の健不健の問題となる。あはれ次代の國家は卿等の力を要するや蓋し僅少ならざる也。

希くは神の惠みの卿等が身上に豊かならんことを。

新年の福音

エー、シー、マクドナルド

人或は年頭に際して、卒然として過去の經歴を葬りて新生活を始め、舊來の習慣を打破して新生面を開け、と勸むる者あるも、こはいみじき僻事なり。我等はいかばかり斯くせばやと望むも、舊年の總勘定を濟まさでは、過去を無視して平然として進むことを得ざるなり。換言すれば、我等は必ずや、舊年の勘定を今年に繰り越し、而して貸借を其儘繼續して計算をなさゞるべからざるなり。かくて其計算の結果、もし我等が眞理と純潔とに於て得る所多く、且つ刻々變遷し行く空華幻影の類にあらぬ萬代不易の或る物を手中に收め得たる事を發見しなば、我等は宜しく、謙讓の心をもて神前に伏し、我等に眞理を啓示し且つ我等をして之れを會得する事を得しめ給ひし神恩の洪大を感佩しつつ、喜びて新年を迎ふなるべし。さりながら多くの人の經驗すなる如く、過去の生涯の勘定をなすに當りて多くの缺損を發見し德行に於て將た品性に於て、失敗に次ぐに失敗を以てし、蹉躓に次ぐに蹉躓を以てしたる事を知り、人生の義務と勤勞とを盡すに於て遺漏徒らに多かりし事を覺り、又神の指導を拒みて自己の眞生命を豊富にする事を怠りたる事を想ひ起さば、實に我等は、ならば一切過去を忘れ盡して新生涯を開始せん事を希ふなるべし。されど事實につきて之れを見る

に、我等は豫ねて播種したるものは今之れを苅り取る約束を帶べるものにして、過去は忘れんとても忘られぬものぞかし。加之、今假りに人生の總勘定に際して成功と失敗との經驗の外に何物も計上すべきものなしとせば、我等の全生涯の不利益は如何ばかり多大なるべきぞ試みに思へ、我等が銀行に多く貸す時は心自ら驕り、又銀行より多く借る時は意氣自ら銷沈するにあらずや。されど、神の惠みの難有さよ、眞理を探討追求する人生は、眼前雜多の事況によりて左右せらるるが如く果敢なきものにあらず、神の据ゑ給ひし礎石の上に置かれて泰然として動かざるものなり。人生に於て唯一の不變不易のものたる品性は、單に成功と失敗とによりて作り上げらるゝものにあらず、一種神靈の力の之れに加はりて成るものにして、發しては精力と清節との流となりて、威武に屈せず、富貴に汚がされず、貧賤に辱かしめられず、滾々として末遂に神性の果てなき大洋に流れ入るものなり。是れ豈我等が耶蘇基督の事實に於て見る所にあらずや。而して此の奇しき神靈の力を、人生の總勘定の内に計上してこそ、我等は新年の福音を學ぶことを得るなれ。顧れば過去の年は流水の如し。遠く去りて復歸らず而して我等は過ぎにし經歷を再び茲に繰り返さんと欲すと雖も、其よすがだにあらじ。よし又之れを繰り返すことを得るとするも、成功失敗の跡に鑑みて人生には不變不易の分子あり。我等は收めて以て之を自家藥籠中の物となすことを得る所以の道を領會するにあらずんば、所詮同一の徒勞を反復するに終らんのみ。我等もし過去の失敗を回顧して、援助を得ることの必要なる所以を覺り、又過去の成功を追懷して、眞生命の三昧に悟入することを得ば、然らば茲に始めて新年を迎ふるにふさはしき態度を會得したりと謂ふべく、而して過去を離れて翻然として新生涯に入る事を得べく、且つ又過去が與へたる敎訓によりて、將來の生活に威儀と責任との新意義を加ふる事を得べきなり。斯くて日々生命の泉頭に飮みて我が衷心の渴を醫し、愈々主に接近して、其恩寵に浴すること益々滋く、刻々我品性を向

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上發展せしめて、歩一歩至高至眞の理想に向ひて進み、其極遂に眞人の眞目的たる『基督の充ち足らへる御姿』を反映するの域に達せずんば休まざるに至るべし。斯くてこそ基督の如く、神を悦ばすを得るなれ。されば我等をして、過去に鑑みて將來を警戒指導せしめよ。然らば我等は歡喜と希望とに充ちて、我等の日常の生活を祝福し向上せしむる活ける神の力を確信しつゝ進み、一言一行悉く神を悦ばすことを得るに庶幾からん乎。

婦人化粧の美と信仰の美

櫻　喬　生

化粧と信仰、皆樣は屹度其のコンツラストの異なるに驚きなさるでしよう。否稍もすると、其の不敬不信をお咎めなさるのかも知れぬ。が然し、生は決して之を一時の笑話としたいとは思はぬ。最も眞面目に最も忠實に、我が筆を進めてみようと思ふのである。

生が此の一篇の復案を立てた動悸といふのは、ちと古いが、去年の夏休み中、友と親しく川上の清流に遊むで、樂しく一夕の閑話を試みた當時に溯つてみねばならぬ。當時生は少からぬ興感と信仰の御光りとを友の身邊よりして感受したことを告白する。否衷心感謝の意を表するのである。て此には、當時語りもし、又其後少しく考へもした、我が思想の跡を、一通り記してみたいと思ふ。

化粧と信仰！元より其形式の上に於て、天地雲泥の相違あることは、生とて初めより認め得ないわけではない。が、少しく其の內容深く立ち入つてみると、其處に亦非常に面白い關係が出來て居るし、色々と類似一致の諸點も潛むで居るやうに思はれるのである。『釋迦に說法』の批難があるのかも知らぬが、生は先づ順序として、化粧の意義より、我が筆を起してみたいと思ふ。

一體人類なるものが共通的に情意を具へて居る以上は、誰だつて美を好まぬといふ理由はない。蓋し

美なるものは、吾人にとつて、僅かに之一種の快感で、滿足である。のみならず、同時に又人類生活を高く豐富にする向上的一種の刺激なのである。否、吾人人類にとつては、別に是といふ理由はないが、唯一意自然的要求として、美を得、美とならんとする慾求を有つて居るものである。殊に『美』を以て、唯一生命として居る婦人女子に取つては、單に形式的容貌の美のみならず、內容的心情をして出來得る限り美しく、高潔にしてゆく必要があると思ふ。

形式的顏容の美は所謂化粧品といふ人工的香油や白粉などで以て、其目的を達することが出來るが、今一面の內容的心情の美は、然らば如何にして發現することが出來るか。此に至て生は麗はしい淸らかな信仰が、一種の化粧的藥味となるのだと信ずる。

由來日本の婦人は化粧史の上では寧ろ失敗した部類の一なのである。單に香油や白粉を澤山に使つて、思ひ切つた厚化粧を加へ、一枚のハンカチに一瓶の香水を蒔いて、我こそは……と得意がつて居るのは、之れ全然化粧の眞意を解せぬもの丶業である。何も化粧は化粧其物が貴い美しいものではない、唯化粧を以て天然の肉體美を補綴する、其處に化粧本來の意義が在り、又婦人に愛好せらるゝ理由が存して居るのである。

要するに「化粧をして化粧其物と見えしむる」のは、從來日本婦人の間に行はれ來た習慣方法であるが、外國婦人などに就て見ると、大に之とは趣を異にして居るやうに思はれる。彼等は單に化粧を化粧其物と見えしむることを避けて、『天賦の美其物』のやうに見せかけるのである。此に於てか外國婦人の間では、化粧なるものが自づと一種の秘密となつてくる。彼等は常に、如何にせば、化粧をして天然的肉體美と融合せしむることが出來るか。又化粧をして化粧其物と見えざらしむるには如何にすべきか……彼等は常に斯樣に心掛けて居るのである。單に厚化粧をして「お化」のやうにする化粧術と、天賦の肉體美のやうに見する化粧法とは何れが其眞意を得たものであらうか。問はずして從來日本の化粧術——少なくとも一般中流以下に行はれ來

たりしもの——の誤れることを悟られるてあらう。あながち化粧や、化粧室の秘密を守らなくても、化粧をして天賦の美其物と一致融合せしむる一事は、日本婦人が僅かに彼等に學ぶべき一大特質だと思はれる。

此の筆法は、單に容色の化粧のみならず、心情の化粧たる敬神の上にも論及することが出來るのである。「神様」だとか、「宗教」だとか、乃至は「信向」だとか「エス」だとか、口癖のやうに喋つてゐる人に限つて、事實上眞の信向、眞の宗教は解して居ないやうに思はれる。自己と神、肉と靈、是を密接に融合一致せしめて初めて宗敎の妙味に到達することが出來るのである。信仰は信仰、自身は自身と、丸て別々に分離して居ては、化粧を化粧其物とみせしむるのと同じて、笑ふべき寧ろ憐れむべき人と云はねばならぬ。要は一致融合に在る。融合し一致した美は、恰かも容色の化粧で秘密を守り合ふやうに、心情の化粧たる信仰に於ても、自然と口を緘むで、平靜を守るやうになるのであらう。「底ひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波は立て」といふ歌は、能く此の兩者の眞義を穿つて居る妙句だと信ずる。

が、然し化粧美を發揮する婦人は、矢張り是に相當した容色の人たるを要するが如く、眞に麗はしい信仰を感受する人は、矢張り之に相當した内心の清淨を計らねばならぬ。元來化粧法の上からみると、白粉や香油などいふものは寧ろ枝葉に屬すべきもので、其の根定に何かしらむ土臺となり基礎となるべき者が存して居らねばならぬ。美しい乙女の唇に薄化粧をして始めて天女のやうな審美を輝かすことが出來ると同様に、美しい淸らかな心情の人にして始めて麗しい信仰を宿すことが出來ると思ふのである。で、吾人は、心の化粧を施すに前だちて、先づ虚心平氣、水のように鏡のやうに自己の心を清める必要があると思ふ。唯徒らに神を呼び信仰を求めても、内心の澄まぬ不淨不純の體内に、どうして神の御姿を寫すことが出來やう。どうして麗はしい信仰を宿すことが出來やうぞ!?

世の中には隨分外形だけは非常に立派に上品に見え

ても、其の内面に於ては、至て汚い下劣な者が往々にして見當るやうに思ふ。『黄金の重箱に馬の糞』とは能く這般の矛盾を罵倒し盡した好個の文字であるが、外貌のみ如何に上品に美しく粧飾を加へて見ても、其の内容たる心情の清美を忘つたならば、如何程俗界からは『美人』だの『別嬪』だの、『人形のやうだ』などともて囃されても、所詮は『錦裡に馬糞』のお仲間入りをせねばならぬ悲運に際會するのである。以上は單に婦人方に限つて述べたのではなく、一般人類といふ廣い意味に於て用ゐたことを一應注意して置く。

之とは反對に、外形や容貌はよし十人以下であつても、内心の非常に高潔な美しい方が幾らもある。

例へば軒は朽ち垣は破れても、家具調度の整然として、庭さきなどに塵一本もない瀟洒な靜やかな住居を訪問しましたならば、吾等は何とはなしに家人の心も推し量られて、知らず〱の中に高雅の情を胸深く湧かすことでありましよう。此等の感想は日本中古の物語類例へば源氏物語——などを一通り御覽なすつた方は幾らも經驗せられることゝ思ふが、實際に吾等は外見を飾る無迷虚飾の人たるよりも、寧ろ内心の貴い粗單の人たるを願ふものである。

然し眞乎の美なるものは、どうしても内容外形の一致和合に求めなければならぬ。内容の美と外形の美、之が相一致融合したならば、如何ばかり人間審美の光りを發現することが出來ましようか。生は讀者諸姉が、外的容貌美の發揮に勉むると同時に、又内的心情の美をも、併せ磨くことを切に勸告するのである。

と云つても、信仰や宗教は、決して道具視し、方便視せらるべきものでないことを篤と承知して貰はねばならぬ。實はある『目的の爲に信仰を得る』といふことが、既に面白くないことで宗教本來の趣旨に違つて居るのである。然し、全く信仰を得ない人よりか數等優つて居る。唯『人間心情の飢渇慰藉としての宗教』に及はざるを嘆するのみてある。何も心の美を發揮する爲めに宗教を用ひたとて、罪過を構成するといふわけではないが、是を以て宗教の本旨を盡した者と思つた

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ならば其れこそ大なる誤謬といはねばならぬ。

「登りゆく麓のみちはかわるとも
おなじ高根の月をみるかな」

或る意味に於て、結果は其の手段を是認することがある。勿論總べてとは云へぬが、確かに一部の眞理はこもつていると斷言しても差支はあるまい。

最後に御斷りを申して置くが、讀者諸姉は既に基督の御教へに依つて、美しい信仰を得られた方々である。信仰ある人々に向て此の如き御説法を申すのは、甚だ潛越な次第であるが、若しか皆様のお友達の中で、信仰のない不具な方が、ありましたならばどうか此の一文を爐邊參集の折に、お讀み下さるやうに願つて置きたいのである。蓋し之れ神の意志で、又敷ならぬ生が唯一希望なのである。

（完）

文藝

湯元の紅葉

女子英學塾　辻村靖子

日光まで行つて、中宮祠の秋を探らねば、物足りぬ極みであるが、中宮祠から僅三里、しかも山道は險惡もない、秋の香の溢れるやうな秋の聲の身にしむやうな湯本の奥を、知らずに引かへすのはことに殘りをしいのです。

山も谿もてりわたる紅葉の夕映、巖も木立もさ霧にと鎖ちらるゝやうな、方等華嚴、美くしい物凄いのに飽き充ちた眼で、戰場か原の夕けしきをみると蕭條たる天地の秋に感極つて悲しくなる栂や楢の林こしに、目映いほとの秋の陽影をあびながら、簌々と落葉を踏んでの二里ばかり、見渡しの廣濶い原野にてた。すなはち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戰城原赤沼原である。原にさしかゝろうとする所にそこに一軒の茶見世があつて、軒に小さい猿が繋いであつたのです。こゝ一軒しか無い茶屋であるから、杣も休息めば旅行商人も休む、丁度三四人も腰をかけて居つたか、我々一行がどやどやとは入ると、もう冗談話しもし盡したらしい、杣は何やら鼻歌をうたひながら、てじなに猿の繋いであつた麻繩をクイを牽ひて、

「お猿どうた日和がよくつてよかんべい」

すると其鼠色の手鞠のやうなのはふりかへつて、金睛を光らすとみるや否するするすると二三間圓木を傳つて投るが如く落下ちて來て、あつと云まもなく其側に居た旅商人の菅笠をひつ摑だのです。何と云ふ了簡てしやう。商人は狼狽へる。皆の人は笑ひだす。茶店の老媼さんはそゝくさと片ちんばに下駄をつゝかけて出て、いかつい聲で喝ると直はなした、叱られてもしよげもせずはなすと其まゝかけ上る、軒にとびつくぶら下る頭の鎖をちやらちやら云はせて、蜻蛉かへり猿かへりあらゆる藝當を盡すので、呆れて誰も笑つて居る。

出て憤られるかと思ひの外お客の御機嫌斜ならぬので老媼さんもまづ、謝罪らずにすんでお愛想、心にガラス蓋の菓子箱から二つ三つパンをつまんで手をくつとのばしてみせびらかしながら、「下りてこうよ、パン欲しくないのにかお猿」二三度呼聲をかけても人でも耳にもかけぬどうして拾つたか山毛欅の實らしいのを手につまんで珍らしそうに引つくりかへしてみたり嚙かけてみたり吐きだしてみたり。

「よしよし、たんとそうして居ろよ、今に鷹が來るぞよ、和主鷹が來てもえゝにか」

お猿はまたも平氣である、叱りやうが面白いでは無いか、いかにも、山家らしい、成程、黒髪山と初雪が降つて、餌に饑えた荒鷹が、草も木立も冬枯れた野原の隅々眼を配る時、時雨の軒の木の葉猿、みつかつたが最期逃ることはできまい、まこそ隠れ簑が欲しいてあらうと哀に凄く感じたのでした。

猿に見恍れて居るうちに、時計は午後四時をさしたのです、車夫の催促も道理て老母を先に一行はあとか

ら歩行て漫々てかけたのてあるが、日ざしをみると、もうかう〳〵しては居られぬ、秋の日のつるべ落しと云ふのにまだ行さきは一里あまり、しかも不知案内てあるから、自然と歩調が早くなつた、赤沼原の秋景色どことなく霧が立こめて山も谷も野も林もたゞ渾沌としてけぢめが見えぬ、數千町歩の平坦な濕野は、赤沼風露も蓮華躑躅もかたもなくうち枯れて、彼所に一本此方に一本、葉ばみ盡した落葉松の寂しげに亭立つて居るのが夢のやうに見える鳥も啼かねば蟲の音もきこえぬ。ふと蒼空を仰のくと、水より淸い白雲のはしに夕づゝか、一つ煌きそめた、夫から須臾に三つ四つ五つ星の數が砂のやうにまして行くと共に、四面は漸くほの昏くなつて、風か冷たい楢の葉かさやく、いつか爪先かみえぬやうになつて來たのです、そうなると中に心細い、「あゝ一人旅てはいかなことゝまては來られませんか、」「もう幾町ほどあるてしやう」等と云ふ弱い音もぽつぽつてる夫も談話しが出るまてはまだ元氣が多少か殘つて居るか、やがては誰も物云はない、只おし默つて草鞋の音をひたりひたりとよせて行くのみてある、夫でも車夫を先にやつて、どこか宜い宿をとつて置くやうにと云つてやつたので、迎かてゝ居ろうと云ふのを命綱に氣を勵ましてせつせと行く。すると忽大瀧の響が、三山おろしにつたつて白雨のやうにきこえてきた、ついて崖下の掛茶屋か浴舍かの燈火が秋の螢のやうにみえてきた、やれ嬉やと思つたかそは糠よろこびて湯元はまた〳〵そこてはない後てみれば湯瀧の掛茶屋てあつたのてす、又勇を皷して行きは行つても足は足趴れる眼は昏む、栗の小枝に面を拂はれたり壞えた道に趺いたり弱りはてゝ行くと、あゝみえる、迎ひの提灯か之て、蘇生つた心地かして、平坦な陰濕つぽい木の下みちを行くこと凡二三町、氣の行爲か風が生暖かい、硫化水素の異臭が茹過きた玉子のやうなプンと鼻を撲つて來る。

浴舍は山家の淳朴な待遇か昨夜の日光と違つてまことに居よい、家のつくりが堅牢てあるの入口にすぐ大な爐が切つてあつて爐に火を焚いて居の主婦のものこ

しの慇懃なの何も何も心もちがよい。表二階の二間を拔いて座が定まつて草臥た足と折曲げると熱い香しいお茶がでて、二つ三つの大火鉢に青い熖のたつほど墨を山とつんで是か、第一の馳走と云ひ顏におし据える。ビスケットを一つ二つ喫べて、すぐに着換して浴室に行くと今までは運動がはげしいのと、氣が張つて居たので氣がつかなかつたが廊下を通るときの隙まの風の寒さは殆と氷のやうで身慄戰がでる、浴室は方三間計木口のよい清潔な建築ですりがらすの四枚戸の下に筧てひいた水が混々とあふれ其の上には越楢の丶鉢が置いてあつた、温泉はすこし臭氣があつて温度が高すぎるか草臥足のしかも、がたがたぶるひのでるこは、何とも云はれぬ良い加減で、立昇る湯氣の煙溢る丶温泉の滑かさ外の山氣の冷かさは、霜や降るらん寒さと思ふと、身も心も鎔けるほどであつた。膳部は例の鮨のてり燒、鯉の鱠、自生生芋に鷄卵を落したのがついてあつた。お給仕にでた十六七の女中の、手の太いこと、物々しのうぶな、姿體我家のより順良らしいと思ふたのです。

十八日朝早く起きて、人の行かぬうちにと一浴す。湯上りの浴衣で洗面所へたつと、左りにみゆる白根はもう白雪を戴いて灰白色をした雜木林が瘠せた山骨を圍繞して居る。して幾畝かの後園には青々とした菘蘿の、みごとにさくがきつてあつて上には薄雪か降つたかと思ふほど白く朝霜が置いてある、道理こそ昨夜の風の寒かつたことと今朝の天候は上々であらう山家の初冬を畵にかいたやうて筧つたひの眞清水は掬へば指もかじけるやう口にふくめば、齒がいたい、其水を引いた泉水には睡蓮の二株三株か、みる影もなく霜枯れて、追々その底ふかく、鰭も動さぬ金魚がみえる、目のさめるやうに美くしいのは、庭さきの寒菊の花壇柵にせきとめられた紅葉であつた。

離れがたない、せめて一日は逗留して深山の秋を飽くほとみて、かへりたいと思ふたが、時日が許さぬ、名殘をしいが願がちにてたのです、昨夕の戰場原と趣を異にして、湯元の霜の晨のけしきそがまた好い火山系

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の白根は突兀として聳えて居るのに、其山陰の湯の池は洸漾として微漣も起さぬを落葉松の枯淡栂林の深碧汀の蘆花も斷橋も捨小舟も戸をしめた浴舍もみな影を倒にして池心に落ちて居るのか金閣寺の繪のやうです。あはれ今十日早く來て淡紅濃紅山も谿も秋の色々醉ふたやうな紅葉の盛に來て見たらば、いか計の美觀であつたらう、霜に濡れた落葉を踏み生暖い朝暾を浴びて行くか、また人一人にも遇はぬ、大方朝かまた早いせゐだらう斧をかついて行く杣が一行のあとからきて丹大な音聲て應答へをしながら行くか、汀の白鷗い驚起ちもせぬ。何と云ふ幽邃な風致てしやう。

湯瀧からは湯の池の落口が勾配の急ならぬ懸崖にかゝつて幾千段の白布を繰返すやうに滝々と張り落るのに兩岸の紅葉綠樹か枝を垂れ枘を動して、瀧のひゝきにつれてそよいて居る所宛然青地の錦の上に縷糸を亂しかけたともみえる壯觀です。夫からの戻りみちは記すべきこともないか、只此戰場原の晩秋と湯元の奥の霜晨けしきとは、どうぞ心ある人にみせたいとつく／＼思ひました。

上野へついたのは三日目の午後であつたか、今日は日曜であるので、谷中はにきやかてある團子坂の菊がさかりてあるのてしやう清水堂の下、すりばち山の邊の楓の梢はまた青いのてうたゝ深山の秋が忘れかたく目に浮ぶのてした。

噫、罪劫の風

加奈子

こは三四年前、毎日新聞紙上「貧民街の夜嵐」てふ題下に、三面記者が、同情の涙を以て報導したる悲劇の一節なり。詩句は古きも此の種の出來事は今も尙新たなるものあらんと、今更のやうに五七の調音をのみ列れたる古き草案引きずり出して、所々改訂削除など試みつ、鐵面皮にも本誌の一隅を借りることゝなせり、見む人心してよ。

世は寒く、なりまさるなり人ごゝろ！
月日も駒の師走そら
晴衣裝ふ乙女子は
羽子よ歌留多と騷きあふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

都のさまを餘所にして、
立つや煙のいと細く
芝の枯葉を拾ひつゝ
漁る術もなき身よと
この世を渡る丸木橋、
足のすゝみも難むなり」

年瀨流るゝ濁水に、
浮ぶ數なき罪惡も、
この世ながらの苦劫界、
こゝよ芝なる新網町、
名も貧民の住家とて、
都小路の童幼も
口にはすれど誰れひとり、
足踏みむけむ影もなし、
立つや煙の夢のごと
貧と飢との、分れ路」

師走も空に暮れゆけば、
響く鐘の音物寒く、
あはれを誘ふ凩の
聲は身を切るばかり也、
隙もる軒の月影は、
屋根を通して蘭の目も、
わかぬ破疊のそが上に、
吹くや夜寒の風の羽は
半崩れし壁の間に
襤褸の衣を誘ふなり。」

この世さむしき片蓆、
妻は幼き兒を抱き、
「噫!! 許してよ可憐やな
汝は我肉身の子に非ず、
今や養育む代盡きて、
我等親子の血も淡し
噫!! 許してよ是非なや」と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妻は涙にかきくれて、
眠らむとてか白雪の、
氷あざむく夜の床!

夜は漸々と更けゆけば
流石あたりに音もなし、
妻は覺悟や定めけむ、
靜けく眠る嬰兒を
可弱き細き手をのべて、
襤褸の夜着もてとり包む!
息の通路聲色も、
なく音血を吐く思ひあり、
夢路に續く死出の門、
嬰兒や旅の一里塚!!

靜けき世とて今さらに
なまじ榮華を說く勿れ!!
月に戯れ花に醉ひ、

星よ菫と騷き合ふ、
詩人何の樂ゑかある
汝が奧妙に潛みたる、
熱ある誠貴しや、
起てよ諸人夢醒ませ
榮華の奧も罪あるを
貧苦の巷如何にみる!?

法網一意理を正す
佐倉の志士も吹き荒む
一陣の風如何にせむ
咲くや山邊の花の香も、
一夜の雨を如何にせむ
噫、法網一意理を正す!
貧苦の御手に捧げたる
屆もあはれや花に風
死體の解剖諸共に
一伍血を吐く雲の峰」

あはれ雨漏る芝の戸は
罪劫の風吹きく\て
鐵倉場裡影暗き、
日陰に凋む女郎花、
鳥は梢に歌へども
蝶は園部に翔れども
暗雲四圍を立ちこめて、
眼に映る色もなし、
夕日淋しき獄の裡
語らむ友もなき身かな、」

さはれ荒野に唯ひとり、
雪に匂へる梅一枝、
神の慈愛の露うけて
深山の奥に湧き出る
春の泉よ、幸あれよ
夕日黄金の春の野邊
汝が深奥の胸ふかく
うもれ果てたる誠もて
天地の美をば飾れかし、

あゝ罪おほき人の子よ、
神の御前にひれふして
汝が心靈をまかせつゝ
許しもとめつ、かしづきつ
清き心の香に匂へかし。」

（完）

詩神の寵兒

南岳生

どう考へてみても現世に最も淸らかで愛くるしい者は幼兒であらう、テーロル氏が若し此の世に最も神に遠がつて、又最も神に似寄つて居るものがあるとしたなら、其は「搖籃の中なる幼兒」と答ふるに躊躇しないといつたが、誠に至言であると思ふ。あの夢幻性を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

帶びた幼兒の、小さい淸らかな體内には、神の屬性が至る所に溢れ漲つているのではないか。

あゝ神の化身かとみる幼兒！吾等は此の天眞流露の幼兒に接している間こそは、世の詐りて人の濁りも殆ど消滅し盡したのかと疑はれるのである。あの街頭無邪氣にはねまわつて居る小供、一家團欒の席に絶えず笑の種を蒔いて居る乙女、慈母の乳房に餘念なき嬰兒、あゝ彼等は神體其の儘の化身である、天使其のまゝの表現ではあるまいか、吾等は神の御使とみる此等幼兒に對して、常に是を導き愛撫するの義務を有つて居ると同時に、亦他面、彼等幼兒あるが爲に、深い一種の哲理と、一念不動の信仰とを學び得ることを感謝せねばならぬ。」

我が机上に一枚の寫眞がある。

白衣の姿淸らかに、溢るゝばかりの微笑を含むで、常に無限の詩趣と不斷の慰籍とを與へて居る。

あゝ此のゆかし懐かしの姿！我が呼て「詩神の寵兒」と云ふのは抑亦如何な神秘の影が潜むでいるのであらう？

何人に限らず、人は鋭く美の表現に接し、愛の一念に打たれると、其の刹那「我」てふ感念を沒却してしまつて、いつとはなしに夢のやうな神秘の境涯に辿り入るのである。其處には一の煩ひもなければ悲苦の影もない。紅紫の花、神秘の樂は、天空高くみち〳〵て、いはゞ地上の無我的極美の樂園とでも名くべきであらう。美しい歡喜の念や淸らかな誠の感謝の泉も、實は此の刹那に人の胸深く湧き起る肉感の眞情である。

處で僕は、何心なく書籍の文字から疲れた眼を轉して、机邊にかけて居る罪なき幼兒の姿に接すると、いつとはなしに如上の趣味を享受するのが常である。其の何故なるか、何の爲であるのかは、不斷不可解の謎て、自分ながら奇怪に感じて居る程である！

天使、名は「ちとせ」。肥筑の平野を蕩々と、有明の海に注ぎ入る筑紫の川畔、すみ渡る歌の音おかしう、一家和樂の風をたゝえつ、今年漸く四歳の春を迎えし

といふ、我が懐かしゆかしの友が肉身の小妹は其てある。

思へば丁度去年の秋であつた、銀杏の梢も黄葉味をおびて、寂靜の氣は自づと人の心に泌み入らうといふ長月二十三日の午後、例の如く僕はノート片手に室に歸つてみると、懐かしい崎陽の友よりの一書と側には「寫眞在中」と記した角筒とが机上にちやんとのつけてある。半笑半疑の裡に角筒の封を切つてみると、珍らしや、愛らしき少女の寫眞！

裏には友の筆續とおぼしく、

東都なるおぢさまへ、

九月四日寫す　筑紫の　ちとせ

と記してある。

友は又別封に添書して、

「實は此の夏休み中に、一枚寫眞を撮つたのだが田舍のことて、どうもうまくはとれなかつた。が、君も小供といふと日頃からあまり嫌いの方でもなかつたやうだから、拙いが一枚送つてやる。も一枚一所に撮つたのもあるが、僕のは既に君が手許に殘つて居る筈だし、それに吾等が小供の中にはいつては却つて面白くあるまい、矢張り小供は、獨りの方が無邪氣で、罪がなうて宜いやうだ。どうか僕の片身だと思つて末永く可愛がつて與れ給へ……　……」

見れば見る程、淸らに美しき白衣の姿、ふし目ながらも、微笑を含むで一心にみつめている顔面は友なる兄の面影に何處となく似通つているやうで、僕は思はず、友の名を呼むで衷心、心の喜悦と感謝の祈りとをあげた。

其後、折りふし通信する手紙の奥に、小女の消息は絶えず、洩してきたが、兎角の中に、月は進み年は暮れて榮えある四十一の新年は歡喜の裡に、我等が身邊を見舞つたのである。

忘れもせぬが正月五日の朝であつた。勇ましい郵便の聲と共に一月一日ィ便のスタンプを押した一封の紙面は、筑紫なる兄妹の許より我が希望の新年を祝つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きたのである。並々ならぬ友が厚意は六錢の郵税を拂つてあるのをみてもよまれる。直様、封おし切つてみると、喜ばしい友が新年の感想と共に、美しい假名文字の一封が巻きこんである。

之ぞ僕が『詩神の寵兒』と呼でゐる少女の手續なのである。

オヂシヤマ、オメデトーゴザイマス。

アタイオヂチヤマノコト、ヨークニーサマカラキーテ、シットリマス。ソレデケサ、ウマレテハジメテ、フデヲトリマシタ。ジヨーズデスカ。

ケサ、ニーサマトフタリデハナシタコトヲ、カキマシヨウ。

ニーサマガ、オヂチヤマト、ホカノオヂチヤマノシヤシンヲダシテ、ドチラガスキカトキヽマシタカラ、チーチヤン(アタイノコト)ハ、トーキヨーノオヂチヤマスキダトイヽマシタ。ソシテニーサマオヂチヤマヲ、ツレテコヨートイヽマシタラ、ニーサマツレテキテドースルトキヽマスカラ、アタイ「モチヲタクサンニヤイテアゲル」トイヽマシタラ、ニーサマハフキダシテワライマシタ。

ソレカラ、ケサ、カーチヤマガ、オチヤヲワカシテオイデナサルトコロヘスワツテオリマシタラ、オチヤガワキマシタカラ、ニカイノオヂーチヤマノトコロニイツテ、チーチヤンガ

オヂチヤマ、オキメセオキメセ、オチヤガヤケマシタヨ、

トイヽマシタラ、ミンナニワラワレマシタ。アタイモーイヤニナツタカラヨシマス。サヨナラ

元日　チトセ、

トーキヨーノオヂチヤマへ

何と無邪氣な可愛らしい手紙ではないか。元より僕は此の筆のあるじとは一面の識もないが、何だか未見の兒とは思へぬやうで、直にも抱き上げてやりたい心地がした。勿論「四ッニナリマシタ」とかいてある位だから、友なる兄が筆の手傳をしてやつたには違いないが、僕はそゞろに幼兒の身上を思ひ、澄み渡る筑紫

の川畔、楽しい清らかな家庭のさまが、眼に見るやうに湧き起つて、一種異様の快感を抑へきれなかつたのである！

あゝ、希くば在天の大御神よ、我が愛して敬する遠き筑紫なる彼等兄妹の身の上に、行末ともに、限りなき恩寵と豊かなる幸福とを下さしめ玉へ!!

雑詠七首

辻村靖子

深夜雪、
すゝめ子の噪く音すなり呉竹のねくらや雪にうつもれぬらむ。

古戦場霰、
今もなほくだけし玉のあとみえてあられたばしる粟津のゝ原。

寄道述懐、
あたら身を思ひくたすな位山のほるにやすき代に生れきて。

寄竹述懐、
如何にしてわかよへにけむかしえし竹は千尋のかけとなるよを。

閑庭鳥、
山からす啄み棄てし松の實の二葉生ひそふ古さとの庭。

鷹狩と云ふことを、
鶉ふす千草も枯れてはしたかのまなこゐすこしみかりのゝ原。

遠山霞、
うちわたす松原こしにかすむなり雪またしろきふしのとほ山。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さまよえる聖者

ヘンリー、バンダイク作

櫻 喬 生 譯

讀者諸姉は彼のベツレヘムなる廐の槽上に、貴き心盡しの贈物を捧げむと、遙かに萬里の旅路に上りて、主を尋ねありきし東方の三聖者が物語をば定めし聞き給ひつらん。されと猶、高きみそらに輝ける彼の星光を拜しつ、懷かし嬉しの家を離れて、幾十年の星霜を、あらぬ異郷の山河に踏み迷ひし、あはれ懷かしの一聖者あるを知り給へりや、彼は湧き起る胸の飢渇に忍びも得せず、目もあやなるかしこ西雲の麗はしき境に、唯一人の主を求め憬れて、幾十霜をさまよひめぐりありきしが、如何なる前世の宿業にもや、おなじ東方の三聖者たちと、一つ思ひを晴しも得せず、神の子イエスの御前に現はるゝの機會を逸したる也。あゝ如何にあはれにゆかしの聖者にもあるかな。

いざや諸姉達、暫し御身等が疲れし肉體を爐邊に休め給はずや。吾は此のあはれなる聖者が身の上に就て、思ふも奇しき人心美妙の夢殿に於て、ちぎれ〳〵に聞き得し物語りを續けなむ。いざ暫し爐邊の閑話を許し玉へや。

一、

時は猶アウグスタスケーザルがエルサレムの各地に割據せる諸王酋長の群を統帥せし頃かとよ、パルシアの山谿深きエグバタナの町に、アルテーバンとなん呼ぶ聖者ありけり。

住家は國庫を周れる外廊に近きほとりにあれば、あたりに聳ゆる王者の固め、赤に紅ゐに青に緑りに、さては白銀黄金のまぶしきがごと、眼下に近く七重八重なす城壁を瞰下すのみか、山紫水明なる自然の美中に、王位を飾る冠の、光りを添ふる珠玉かとも疑はれて、天を摩したるパルシア王が夏の宮居も、たゞや、一目に映る珍らかさ！

さてもアルテーバンが住居のほとりには、緑り涼し

き草木の數々、偖は目もあやなる紅紫の花弁打ち亂れ、遙かオロンツ山の頂よりは、幾筋ともなき清水の流れ滾々として下り、小鳥の群は朝な夕なにそが妙なる樂の音をそ奏でける。

さはれ一度膚も寒き秋風立つや、さしも千紫萬紅と亂れ咲いたる百花の色も、すみ渡る霜夜の幕に包まれつ、耳を澄ませし小鳥の樂も、胸深く泌み入る寂寞の裡に消え行けば、あたりには怨咽として咽ぶか如き水の音、嘻々として微笑む如き谷の小川の、身に泌む秋の寂しさのみぞいやますまさりゆく。

あはれ無心の草木さへ、すゞろに無常をかこち顏なる秋の夜を、彼方三層なる帷幕の窓を通して、樹蔭にもるゝ一點の燈火、みえつ隱れつ覺束なげに陰闇の空を照らすは、是ぞ家の主が友なる客と、今し小さき卓を圍みつゝ深き商議をこらすなりけり。

戸口に立ちて、懇ろに客を迎ふる主人の姿――打ち見たる所、四十前後とも覺えて、温厚壯重の偉丈夫、眼は輝き鼻は高く、厚く美しき唇のほとりは何となく引きしまりたる一線を畫せるかと疑はれ、そが廣き額は何處ともなく一種夢幼的詩想にも憬れんとする相を示し、多感的なる、然も一個不動の意志は、著しくそが身邊四圍に溢れたるやうにも思はる――あはれ如何なる時代に生れあうとも、かゝる人は内心の擾亂と退及的生涯とを試むべき相格の人とこそいふべけれ。

件の男は薄物の袴の上に純白なる羊毛の上着を纏ひ、頭には白き尖形の帽を戴き、其が長き襟は肩上に垂れたる黑髮の上にとまれり。是なん火敎崇拜者と呼ばれたる右き邁實僧徒が裝ひなりけれ

客人相續て堂に上るや、主人は樂しげなる低音をもて、いそ／＼と挨拶の辭をのべたり、

「ようこそ！アブダスの君か、おゝ御身に永く幸豊かなれ。おゝロダスペス、チグレース、さては父なるアブガルスの君！おゝ嬉しくも音信れ玉ひたり、數には足らぬ我が家なれど、今宵こそ方々の御なさけに依て、如何ばかり面目を施しぬらむ……」

見渡せば年こそ異なれ、心は同じ九人の主客が、顏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に黄金の光りまぶしく、綿繡の色艶やかに、胸に飛鳥の黄金を飾りたるは謂はでもしるきペルシアの貴族、ゾロアスター一派の教徒なりとは一目の中にもよまれたり。

主客は、やがて窓邊に近き小かなる黒き祭壇のまわりに集りぬ。

壇には小暗き燈火燃えたり。

アルテーバンは進み出てゝそが側に立ち、薄き檉柳の小枝なるバーサムを法燈の上に打ちふりつゝ、乾ける松の小薪と、淸らなる香油とを捧げつ、やがてヤスナの古歌おごそかに、誦じ出づれば、客人の群も續てアフラマスの讃歌に於て聲打合せ、

吾等は此に仁慈と福德との主宰にして、無窮絶對の化身たる全智全能の御神をば心よりして祈念したてまつる。

吾等は神之を創造し給ひしと信ずるが故に　唯一意純にして純なる淸らの事物に向て、誠心歡喜の念を捧げまつる。胸の思は眞淸水の、吾等が一言一行と雖も、ひたぶるに神の御旨に副ひまつらむ。

おゝ眞と歡喜の中にましますマスダの御神よ、希くば我等の身邊よりして僞り穢れの塵を拂ひ、不善束縛の手綱よりして、吾等を永久に自由ならしめ給へ。

おゝ神よ、あらゆる誘惑と悲しみとに滿ちたる吾等が憐れなる生涯の上に、淸き喜ばしき光りを下し給へ！

希くは天地間のすべて、野も山も麗はしき花園もあるは働けるもの惱める者、信者たると未信者たるとを問はず、あらゆる階級をおしなべて、吾等人類同胞の身の上に、輝かしき御光りを與へしめ給へ、

あゝ、吾等が一念燃ゆるが如き眞人なる愛の焔と、榮光を稱へまつる仄かなる讃美の聲と共に、神よ希くは我等が、微意を愛納し給へ!!

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とみれば祭壇の燈火、おのづと淸らかなる樂の音に呼應するが如く、歌のすゝみと共にかすかなる光芒を輝かしつ、純潔華麗の光りの色は、遂に陰暗たる一室の内に燦爛の光りを漲しぬ。

（つゞく）

女子青年會記事

●學生聯合祈禱日に關する勸告書

坤圓球上の基督敎學生は、年と共に益す親善の好みを重ぬるに至りぬ。是れ皆或は萬國學生大會の影響、或は各國學生の訪問の交換或は基督敎學生傳道運動に關繫せる巡回書記の行働、或は學生に關する定期刊行物及び其他の文學の頒布によりて、到處の學生々活及び一般の狀況の普通に知れ渡るに至りたる結果ならん。さり乍ら各國の學生を結び付くる最も强靭なる紐帶は、聯合祈禱に非ずして何ぞや。誰か全世界の學生が共同の利害の目的物に就いて、一致して捧ぐる祈禱の力を測り得るものぞ。基督の事業の學生間に偉大の進歩を遂げたるものは、主として此聯合祈禱に由らずんばあらず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

是に於て乎、萬國基督教同盟會の總務委員は、最近二ヶ年の慣例に基き、千九百八年二月九日、即ち同月の第二の日曜日を撰みて萬國學生祈禱日に充つ。而して委員は、全世界に於ける基督教學生靑年會、及び同盟會の各會員、並びに基督の王國の進歩を喜ぶ各基督教徒に檄して、協同一致して此の祈禱日を守られんことを求む。

學生基督教徒の團體を指導して、此日を最有効に守ることを得しめんが爲めに、敢て前年の經驗に基きて、左の數項の勸告を呈す。

第一、靑年會若しくは同盟會の役員及び主要なる係員等相會合して、此の日の處置に付て計畫を定むべし。此の時に際して本勸告書を朗讀し了り、祈禱の精神をもて討議したる上、祈禱日に關する最良の案を立つべし。

第二、主として祈禱に充てられたる基督教學生の集會を開催すべし。此の集會に於ては本勸告書に添附せる『感謝の要項』及び『祈禱の題目』を用ふることを得。又當該團體が屬する學生基督教運動の諸生に關する特殊の考察並びに要求をも之に加ふることあるべし。開會の辭として學生に對する祈禱の重要必須なる所以を闡明したる簡短なる演説をなし、且つ祈禱の價値を主張せる聖書の主義を布衍するも可なるべし。然れど大部分の時間を祈禱に充つるを以て宜しとす。

第三、此祈禱日を以て、學生々活に關する基督の垂訓を傳播する特殊の事業を開始する機會となす靑年會の數は、益す增加の傾向を示す。此目的のために、出來得べくば、祈禱日の前日、翌日、及び當日に涉りて特殊の集會を開き、此の機會を利用して、基督並びに其王國の要求を、學生の肺腑に徹せしむる策を採らんは望ましき事なり。宜しく全力を盡くして、學生に絕大の勢力を及ぼすべき說話者を招聘することを務むべし。

第四、忽諸に附する時は或は當日の祈禱の最大の効果を空しくすべき危險に對して深く警戒すべし。此種の危險の數例を左に列擧せん。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

當日を公開演說及び討論に充つること。千言萬語祈禱の重要を述ぶるも人々の要求を說くも、竟に實際の祈禱に代ふべからざるなり。

當日を虛禮空式を以て守ること。此の弊に陷ることを避くるためには、司會者は宜しく若干の時間を割きて祈禱の意義及び之れを必要とする所以の確たる事實を反復熟考すべきなり。

此の日を守るに先ちて、隱密に充分の準備をなすを怠ること。基督敎徒が隱密の祈禱に導かるゝこと愈よ多ければ、聯合祈禱の爲めの集會の力も効果も益す大なるべし。

當日の集會及び活動の指導宜しきを得ずして、無効果に終ること。あらゆる犧牲を拂ひても、當日の行事に絕大の責任の觀念を痛切に感じ、又祈禱は禮拜の最重要なる形式なることを深く信じ、且つ祈禱は超自然力の最大示顯なりとの動かすべからざる確信を有する司會者を得ることを務むべし。斯かる係員の信仰と熱誠とは、直ちに他に感染して多くの人々を動かすに至るものなり。

基督敎は超自然的宗敎なり、而して其特徵とする所は、超自然の記號を帶び且つ祈禱に始源するに在り。全世界を通ずる吾人學生社會に於ける大必要は、豈超自然力の最大示顯――活ける神の活動の實在の新表彰の必要にあらずとせんや。此の目的の爲めに、吾人をして吾人の身を祈禱に委ねしめよ。

萬國學生基督敎同盟會總務委員を代表して
委員長　カール、フライス
總書記　バヨン、アール、モット

千九百〇七年十二月二日紐育市西第二十九街第三番館に於て。

感謝の要項

東京に於て開かれし同盟會大會の爲めに捧げし祈禱の感應の顯著なりしことの爲めに。

日本の學生間に於ける傳道事業が、甚大甚廣の影響を及ぼしたる事實の爲めに。

同盟會の諸代表者の巡回旅行――殊に極東に於ける

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に伴ひし祝福の爲めに。

拉丁亞米利加、殊にアルゼンチナ、ブラジル、キユーバ及びメキシコに於ける基督敎事業着手の好望なりし爲めに。

學生間に於ける聖書研究、並びに內外國傳道事業研究の着々として進步せる事實の爲めに。及び此の事實が基督敎の勢力扶植の道を開きたる事の爲めに。

祈禱の題目

一月リヴアプールに於て開かれたる學生有志傳道同盟會の會議に於ける決議の善く從はれん爲めに、又該會議が與へたる利益の頒布せられん爲めに祈れ。

傳道に從事する人の爲めに。殊に益す多くの才幹ある學生が、奮て內外國の傳道事業に就くに至らん爲めに。又諸種の學生傳道運動の爲めに、神の自ら選び定め給ひし指導者の爲めに。

日本、支那及び印度に於ける基督敎學生運動が、亞細亞に於ける福音傳播の千載一遇の好機を善用せん爲めに、特に力を授けられん爲めに。

東京會議及び之れに附隨の事業を通じて、極東に於て基督に從ふことを公言したる凡ての人が、固く信仰の道に立ち、決然として自己を棄てん爲めに、

東京に於ける淸韓學生間の事業に、聖靈の臨在の象徵の伴はん爲めに。

同盟會の傳道者が、希臘及び羅馬加特力敎諸國の學生に對し。更に大なる勤務を盡さん爲めに諸問題を講究するに際し、神靈に指導せられん爲めに。

基督の從者が一致結合せんが爲めに。是れ基督が全世界の衆生が之れを信ぜんことを祈り給ひし所なり。

●會員誘道委員

本文の記者の熟知して居る或る大學の女子基督敎靑年會に於きましては會員誘導委員といふものを組織しまして、大學內の各女學生を指導誘液して行く仕掛にして居ました。そして其委員が細心翼々て事務を完全に遂行して行かぬと充分の成績が擧がらなかつたのであります。其事務の遂行の寸法は、次の樣な至極簡單

なものでありました。先づ其大學には百二十五名許りの女學生がありましたが、其内半數が信者て、他の半數が多分未信者てした。そして該委員は十名て成立て居たのてありました。ところが此の百二十五名を、十名の委員に相當に配賦しまして指導の任に當らしむる樣にしたのですから、つまり委員の各員は十名乃至十二名に對して責任を有したわけなのてあります。そして此の配賦の寸法も、よほど周密の注意を用ひて致しまして、各女學生相互の感化力やら、友誼の關係やら、但しは互ひ〳〵の間柄を親密に導く樣な種々雜多の事柄を斟酌して定めたのてありました。尤も此間の消息は悉く委員間にのみ深く秘して、外部に漏らさなかつたのてあります。てなければ、仕事をなす上に非常な妨害になつたからなのてあります。さて此の配賦がきまりますと、委員長は各委員に一通の手紙に、各委員の管轄の下にある女學生の名前を書き添へて渡しました。て、各委員の任務はといへば、

一、自己の管轄の下にある信者の女學生が益々信者としての德性を進むる事を得る樣に祈ること。

二、未信者の女學生が基督を知る樣になり、且つ基督により益々完全なる生涯に入る事を得るやうに祈ること。

といふのてありました。又委員は青年會の諸種の集會やバイブルクラスへ出席しない人を、出席する樣に勸誘し、又女學生相互間の友誼を深厚にするやうに盡力し、且つ百方手を盡して之れ等の女學生を監視して行く任務を帶びて居たのてす。此の任務は一時一寸これを遂行すればそれて濟むといふやうな性質のものてなく、各委員は一年間を通して、自分に委托せられたる女學生を、どこまでも奬勵し援助して行く任務を有して居たのてあります。

以上の樣な仕掛けて、若し委員の各員が忠實に任務を果して行きますと、全校の各女學生が、直接間接に青年會の感化を受ける事が出來る樣になつて居るのであります。勿論委員は充分の注意と思慮とを用ひて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

各生が相助けずして却て相爭論する樣な事がない樣にしなければなりませんかつた、從て一人の日々の進步が直ちに延いて他人の進步に影響する樣に出來てたのです。そして事實上諸種の集會やバイブルクラスに出席する人の數が增加し、又出席もよほど確實に且つ規則正しくなりまして、そして多くの未信者がいつしか基督に歸依して、新生涯に入る樣に導かれることが出來る樣になつて居たのです。

我が女子青年會の事業に於きましては、神は學校內の各女學生――信者たると未信者たるとを問はず――に對する責任を我等に負はしめ給ひました。信者の學生は日々德行を進めなければなりません、でなければ折角得た光りもいつしか消えて仕舞ます。又眞面目に光りを求めて居るものは、これを助けて行かなければなりません。又今まで不注意で居た者は、基督敎的生涯の根柢に橫はれる美と力とを了解しなければなりません。そして又私共は――神の援助を信じて此責任を引き受けました以上は、それぞれ準備をしなければなりません。迂濶り怠慢の間に日を送て居りますと、私共の進步と奬勵とを望み、又私共の援助を待て居ります人々を失つて、それこそ取り返しのつかぬ失策を演ずるかも知れません。

小石川傳導女學校青年會報告

神の祝福のもとに新らしき年をむかへしことをほぎ奉る

當會に昨年十一月に於て開きし會は

一會の種類

役員會、講話會、感話會、祈禱會

一會の數

講話會	三回
役員會	一回
感話會	一回
祈禱會	一回

一集會者總數　九十三名

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

　　內、客員　　　　　　　五　名

一平均壹回の集會者　　　十八名强

　　內客員　　　　　　　壹　名

一役員會には二名の缺席ありて四名出席なし尙顧問としてミスパアンフアインドの御出席を願ひ候

一役員祈禱會は每週一回開き居り候ひしも、時間の都合、あるひは其他種々の事より、一つ所に集まりて、祈禱なすことの難きより役員順次に其の祈りの題を定めて役員に報告なし、每週土曜日午後七時より十時までの間に於て各自の家にありて祈ることゝなし此の月に於いては三回御座候。

十二月に於ては

一會の種類

　　講話會

一會の數

　　講話會　　　　　　　三　回

一集會者總數　　　　　　七十二名

　　內、客員　　　　　　十　名

一平均一回の集會者　　　二十四名

　　內、客員　　　　　　三　名

最終の會の折にはミスマクドナルドの御講話を願ひ後いと靜かに主の御降誕を祝ひ一同よろこびに滿ちて散會致し候。

尙主は此の日新らしき二人の姉妹を此の會に與へられ候。

一役員の祈禱會は十一月の如く各自の家にて三回いたし候

一現在會員　　　　　　　三十五名

　　內、名譽會員　　　　八　名

　　　　正會員　　　　　二十一名

　　　　准會員　　　　　六　名

會員の數の前回報告申候より減ぜしは名簿の上の會員にて絕へて出席なきより問ひ合せしに遠くに行き或は都合にて退會せられたるよりかくは僅となりし次第に御座候

昨年の中に主の御前になしたる事は、いと僅にて數ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るに足らざれども、今此の新らしき年を迎へしと共に新らしき勇氣と信仰を以て、主のために働らかんと、其みたすけをひたすらに主に祈り居り候。

右報告申候也

明治四一年十一月七日

小石川區傳道女學校内

基督敎女子青年會

大阪ウヰルミナ女學校青年會よりの通信

恭賀新年

當青年會十二月中の事を左に報告申上候

十二月四日水曜日

會長司會の下に青年會の講演會を開きたり。當日ダクターコレールの有益なる講話及び同氏夫人の獨吟ありて盛んなる集會なりき。當日集會者二百三十餘名。

十二月十八日

如何に語るべきかと云ふ題をもつて祈禱會を開きたり。本年中最後の祈禱會なれば各會員熱心に感話し或は祈禱し、讃美などして最もよき集會なりき。なほ當日一名の姉妹は神に從はんと決心せられし其のよろこびを公に告白せられたり。

廿四日

午前九時より會長の司會の下に青年會のクリスマス祝賀會を開きたり。

各組よりの祝賀の新體詩　和歌などあり、又クリスマスの歌など唱ひて一同眞心より此目出度日を祝せり。此會の後直にひつゞきて今年中に信者になられし敎師姉妹方の歡迎會を開きたり。青山敎頭歡迎の辭をのべられ、又歡迎の和歌ありし後、伊藤姉答辭せられて閉會せり。信者になられしは敎師二名生徒三十五名計三十七名なり。又此會の後親睦會を開きぬ。色々おもしろき狂言などありて一同歡をつくし

て閉會せしは十一時すぎなりき。

ウヰルミナ女學校青年會書記

東京青年會御中

名古屋女子青年會第一回の報告

十一月二十八日午後二時より名古屋聖使女學院長ウヰンウヰルソン氏主となりて青年會々員を招待し會員相互の親睦をなし樂しくあそぶことと一時間程にして茶菓を呈し茶を興しながら時の經濟を思ひ委員選擧を行へり即ち會の事務を整理せんが爲に左の委員を選定す、

會長一名、副會長一名、書記二名、會計一名

選擧おはりて三時半より名古屋市立高等女學長の「神信の念」と云ふ講話あり續いてミスウヰンウヰルソンの有益なる講話即ち會員の最も貴重すべき眞の愛につき述らる、其要點左の如し

第一、女子青年會の重なる主意は品性を高めかつ相互に睦ましくなすにあり之をなすにキリスト教主義を甚とす如何となればキリストの愛程人の品性を高むるものあらざれば也

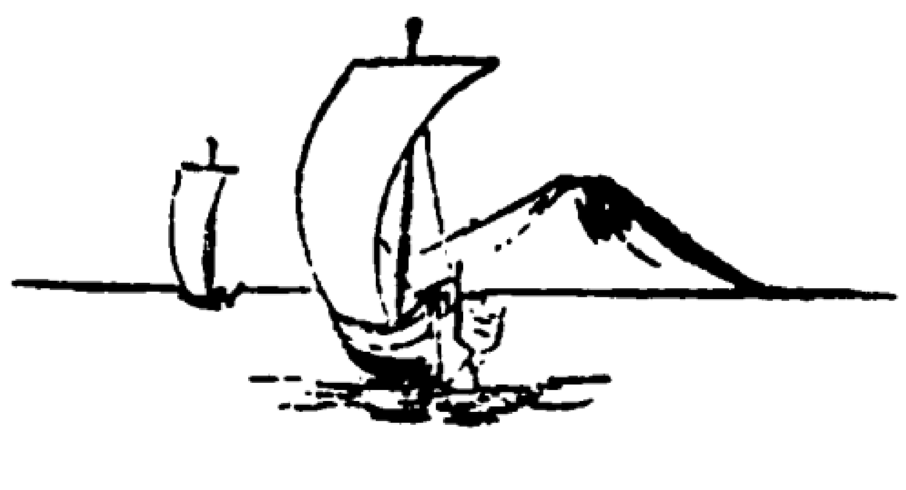
第二、如何にしてこの愛を得、またみたされ得るや

(イ)最も高き愛を主に依りて知ること

(ロ)其愛は自己のためなる事を知ること

右記せしは講話の大要なり之に就き種々なる適例多くあげられ會衆は幾分か其高尙なる愛をしたふが如きものありき

祈りを以て五時頃閉會となる



二十五年の夢の跡

大晦日の夜陰、西大久保の寓居、風の窓に於て、

櫻喬生

其の一

今歳も既に暮となりぬ。

舊るきと新しきと、暗と明との境を描ける大晦日の夜の幕は、靜かに宇宙の大を包みて、空には鮮かなる星の閃めき、寒けく澄める一痕の月輪もろともに、赤裸々の枯木を照らせば、空には置時計の歩み吃々として、一秒一歩タイムの路を馳せ行く音のひし／＼と我胸裡の奥深く響きては、身はさながらの仙となり、雜念憂苦の塵をも止めぬ靜やかさ。

いてや今歳の筆おさめせんと、我はやをら硯に對して白紙をのべぬ。

思へば過ぎし我が二十五年の生涯や、さては來らむとする奮闘のさまなど、交々我れと我が胸に亂れ入りて

は、しかすがに不安と畏懼との念に打たれて、我は思はず身を縮めて慄きぬ。

世は、またく眠れり。

何處ともなく犬の遠吠え仄かに響きて、寂寞の氣は四邊を壓す。

例ふれば九十九折りなる夜の細路蔚乎と茂る樹林の影に、一點紅火の見えつ隠れつ、覺束なげに、我眼を射るにも似たるかな。

思はず我は筆を投して暫し默想の境に入りぬ。

其の二

默想に入りし我れは、陰影暫し眼を鎖して、黒暗々たる眼界の中、それともなく紅紫の二線、入りつ亂れつ、我が目前に閃き映るを覺えぬ。

然かも一度眼を開けば、光影忽ちに消えて跡なし。

然はあれど我が冥默の中、何處ともなく美しき紅紫の二脈が、陰暗たる我が眼界の中に浮游せるを否む能はず。かくて細く、かすかなる紅紫の光りは、いつとなく我が心の眼に感應して麗かなる二個の光虹となりぬ。

美しく華やかなる紅の色は、詩歌の形を現して妙なる樂音を奏し、麗らかにも仰ぐべき紫の色は、正しく宗敎の影を寫して萬朶の花と匂へり。

忘像か、あらず、架空事か、あらず、默想せし我心の眼はたしかに然か觀取せしを如何せむ。

古へ紅紫の二色は上層貴族の專有として禁色の制おごそかに、高僧の紫衣、あて人の緋衣、共に高く麗はしきものとせられぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かくて。あゑかにも禁色の制に加へられ、高僧貴族の專有として其の美と壯とを擅まにせし紅紫の二色が、美の表象に強く、一種特得の感想を洩せるの事實は、今も昔も異なるところあらじかし。あゝ、陰影深く眼界を鎖し、黑暗々として咫尺を辨せざる冥默の中にも、なほ美し優しの光りは滅せざる也。思へば紫と赤、其の色彩のエキスプレッションにこそ多少の相違はあれ、其が與ふる美妙の感想に於ては、二者共に一なるが如し。

かくて美し優しの紅色は正に詩歌としての標象（シムボール）にあらざるなきか。なつかし親しと思ふ嚴かなる紫色は或はこれ神佛の化身にはあらざるなきか。

如上の關係よりして余は紫色と紅色とが極めて類似の色彩たるを認むると同時に、其が標象する詩歌宗敎の上にも亦一種密邇たる——或は寧ろ一身別體ともいふべき者の存するを疑はず。いてや詩歌と宗敎との關係に就て少しく我感想の跡を尋ねん。

其の三

詩とは何ぞ、宗敎とはそも亦何物ぞや!?

是、蓋し人類最始の疑問にして亦吾人最終の疑問なるべし。

吾人は之れに向て其の多くを告げざるべし。何となれば人にして、もし虛心平氣、靜かに天地自然の大を思はゞ自から其の妙趣天地の神韻に接し得べしと信すれば也。

蓋し詩の對稱とも謂ふべきものは、其れ絶對の美と無上の眞となるかな。

宗敎の對稱も亦神と絶對美との外に出でずと思はる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鳥は常に身を蒼穹の廣きに任せて虚空の高きに翔るが如く、吾れ人の心眼は常に向上の一路に在り。一面肉の慾求を滿たさんと勉むると同時に他面高潔なる靈の滿足を求めんと欲するは吾れも人も恐らく異る所あらじかし。かくてこそ黄金の眩しき光りよりも一莖の野花を美なりとし、宮殿樓閣の樂音よりも自からなる谿間の鳥聲を親しとす。人のこゝろは常に其の本體と共に自然詩美の中にありて宇宙の眞髓と相合致せんとする傾向を具せり、此に於てか吾れ人は生れながらの小詩人なると同時に亦他面に於ては天然の小宗教家たるを失はざる也。

嗚呼萬人等しくこの生れながらに具有する純美の心を以て終生不變の心となさば、如何ばかりこの世は美しゆかしの薫りに滿ち〳〵たらんものを。

さるにても人間意識の眼漸く具はるに至るや、肉の慾求次第に募りて、淸透高潔なる靈の光りは、漸次にその影を暗まし來りて遂には純潔なりし小詩人小宗敎が嬉し懐かしの面影もあはれ心猿意馬の蹄にかけられ凡庸愚俗の谷間に沒却し終る。此に於てか高く嚴かなる神の敎へなからざるべからず、美しやさしの詩歌なからざるを得ず。

宗敎は飽迄も尊き神の力を以て一切衆生を救はむとし、詩歌は結局純潔高雅の美を以て倒れんとする衆俗の心を覺めしめんとす。

縱令神の敎への宗敎が、嚴正謹肅にして寸毫も侵す所なしとするも其の深遠なる眞理、一種美し優しの詩歌ひそまずやは、

アララカンの林窟に木の實もて飢を凌ぎし太子悉達が一度雪山七年の苦業を出てゝ波音高き南印度の地に悟道せし妙法の敎を說くや、あるは亦ベツレヘムなる廐の槽上に生れましたる人の子耶蘇が、荒漠たるユダヤの

野頭に天國の美を敎ふるや、其間彿々として泉みき渡る極美の詩美に打たれたるものなからてやは。

あゝ野にありて昨日を待たざる一莖の野花に、ソロモン大王が榮華の極みも企て及ばざる宇宙の詩趣を惜まざるものは獨り造化の心なり。一基の卒塔婆も一屋の藁家も詩人の眼、宗敎の眼よりみれば、一種の美と神意とを現はせるもの、二者其の流れこそ異なれ、歸するところは等しく是れ天地を收め萬有を包む宇宙自然の大海のみ。

一莖の野花も、一塊の土石も、詩人の眼、導者の胸裡には實に無限無量の詩美あるなり。蒼々たる天空、彼等に取りては單なる虛空に非ざりき。其處に輝く星の光りは決して意味なき天體には非ざるなり。神の敎へ詩歌の美、共に是れ宇宙の本體を究め、無窮を追ふの聲にあらずや、天地の中、萬有の間、見ず聞えず、觸れざの處、其處にも亦無聲無韻、無形無象の詩美はあるなり。

水の流れ、木の葉の囁き、皆夫々一種の妙と哲理とを具せり。たゞ凡俗の眼これを觀取するの能なきのみ。

之を要するに詩は宇宙の萬有を美化し、宗敎は天地事物を神化して、其間共に一點の汚濁を許さず。宗敎は人に神を敎へ、詩は人をして絕對の美と相混和せしむ。二者共に自我の念を去り、自己を埋沒して平等無差別、絕對至高の樂境に導き入らしめんとする點に於ては一也。

此に於てか、詩歌と宗敎と又殆ど相接して更に平等無差別化せられんとす。所詮吾人は兩者の根源に於て將亦其が形成に就て全然其の基を異にせりと思考する能はざる也。

其の四

とみれば雲のあなた綠靑の薄雲なびき、月の女神は榮えある夜光の翅に駕して、地上宇宙の闇を照せば、美

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妙の樂音みそらに起り、平和の色下界に溢れて、妙なる詩美の大宇宙は今や吾等が眼前に近く廣ごれり。

「二十五年、あゝ孤島の夢は覺めてけり」

花に憧がれ野にすさび翺翔有樂に一身の重きを忘れたりし過去二十五年の春秋は、かくて敢なき一夜の夢と消え去りぬ。

思へば東亞の一隅、鎖國の夢を貪りし二千五百年の我國史は浦賀の砲聲以來、明治維新の曙先に接して、一意船を文明の潮流に駛せぬ。

嗟吁、明治維新の改革は、これぞやがて舊日本と新日本とを區割する一條の帳幕なりしなり。さるにても明治文壇の賑かさよ。いまだ混沌紛亂の狀を描きて其歸するところを知らずと雖も、一菅の筆一片の誠あるもの、如何て瞑默の夢に、醉生夢死の愚を忍ぶべきや。

其の五

夜もいたう更けぬらし。

燈火暗うして冷氣切りに膚に迫る。

仄かに爽々の聲あるは豐多摩の一隅、雜木林の詩韻を奏づる樂音なるべし。

架上のクロックは吃々として一歩一歩と我胸深く刻みゆく。

「二十五年、嗚呼孤島の夢は醒めてけり」

紛々擾々として、さながら走馬燈の如くなりし過去二十有五年の我夢は、今や希望の光り滿ち〳〵たる覺醒．皷舞の氣に觸れぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我が進み行く道は定まれり。ホープの光り耀炳として、羽は生じ雲は起れり。何時までか幼き過去の我に執着して安かりし孤島の夢に潛むべき!!

我がのる舟は定まりぬ。エンジンの火は燃えたり。南洋の島、北海の濱、自然の詩美は滿ち／＼たり。何時までか武陵桃源の夢に耽けりて、陸上安穩の生活に甘ずべき。

『あゝ二十五年、安かりし孤島の夢はさめてけり』

一語よく我が過去の歴史と生涯とを語りて餘りあるべし。

凩の音一切り、窓邊を音のへば天地の神籟全く絶えて、たゞセカンドの音のみ冴え渡れば、靜寂の氣愈深きをおぼゆ。

さらば／＼。過去二十五年の生涯や、我は如上の辭を以て、懐かしゆかしの爾と別れむ。

夜もいたう更けぬらし。

さらば今宵の筆を止めて、之を今歳の書きおさめとなさむ!

（完）

○シユライエルマッヘルの宗教觀

宗教は有限の中に無限を感し、無限の中に有限を感じ、自我の中に宇宙を感し、宇宙の中に自我を感ず。言ひ換ふれば、宇宙の道理と受肉の道理との和合感である。宗教は知能に非ず、意志に非ず、情感其の物て、病的情感に非ざる限り、凡ての健全なる情感は宗教であるといふ。

故に人々の論難攻撃する教理信條の如きは宗教ではない。是等は認識の對象であつて、其の是非曲直が如何樣に批判せらるゝとも、宗教にはチットも關係はない。蓋し宗教の領分は知能に非ずして情感である。教理や信條は知能の領分に屬して情感に屬しない。彼と此とは領分違いであるから、信條の如何は宗教其物に頓着する所ではない。若し信條を承認して毫も情感の發動することなくば、宗教の見地より見て之を僞善といふ。

宗教には正謬なし。唯眞僞ばかりである。信條や教理や儀式の上に宗教を求むるは僞りである。(海老名氏基督教本義の一節)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

YOUNG WOMEN

OF

JAPAN

Vol. V *January, 1908.* *No. 1,*

Miss M.A. Whitman, Chairman

Dr. Kei Okami, Vive-Chairman

Miss A.G. Lewis, Recording Secretary

Mrs. G.M. Fisher, Treasurer

Miss Michi Kawai, Active Member of the World's Committee

Miss Sumi Miyagawa, Corresponding Member of the World's Student Christian Federation

Resident Members	Non-Resident Memebers
Miss Ume Tsuda	Miss K. Tristram, Osaka
Mrs. Hatsu Watanabe	Mrs. G. S. Phelps, Kyoto
Miss A. B. West	Miss E. M. Soper, Nagoya
Dr. Tomo Inouye	Miss N. B. Gaines, Hiroshima
Miss Hama Hirano	Miss L. Zurfluh, Sendai

Miss A. Caroline Macdonald,
General Secretary

Miss Stella C. Fisher,
Assistant Secretary

Headquarters:— 15 Dote Sanbancho, Kojimachi,
Tokyo

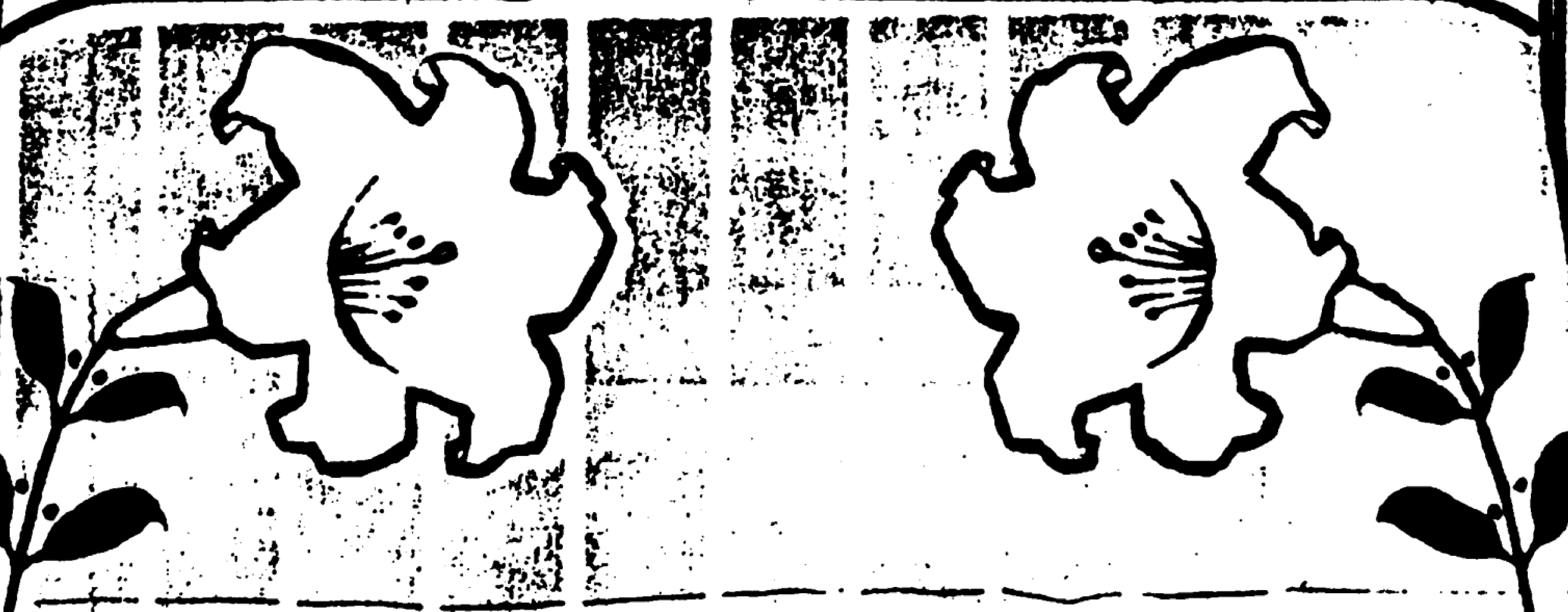
Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治四十一年一月十五日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

YOUNG WOMEN OF JAPAN



For other foundation can no man lay than that which is laid, which is Jesus Christ. 1 Cor. 3:11.

Vol. V. ***January, 1908.*** ***No. 1.***

CONTENTS

EDTORIALS:—

New Year Greetings .... Editor
The Message of the New Year .... A.C. Macdonald
The True Beauty of Womanhood ...... K. Kawazoi

LITERATURE:—

Autumnal Foliage at Yumoto ...... Yasu Tsujimura
The Burden of Sin (A Poem) .... Kanako
The Favorite of the Muses .... Nangakusei
Tanka .... Yasu Tsujimura
The Wandering Saint .... Okyosei

ASSOCIATION NOTES:—

A Call for the Observance of the Universal Day of Prayer for Students.—The Membership Committee.—Reports.

SUPPLEMENT:—

Twenty-five Years of Dreaming .... K. Kawazoi

東京神田美土代町三番舍印行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA